

チンパンジーと人間



山下俊郎

数年前の本誌に、わたくしは狼に育てられた人間の子どものことを書いた。この狼の子のことは、わたくしだけでなく、いろいろの人びとによって著書や論文の中に紹介されたから、いまではよく知っている人が多いと思う。狼の子どもという誠に得難い貴重な資料は、わたくしたちに、どのような優れた人間的素質でもこれが文化の中に育たない限り現われてこないことを教え、文化的環境というものが大切であることを教えてくれるとともに、また人間的素質は人間的文化的環境へ帰るとき、のろいテンポではあるが、人間の姿へと発展するということを教えてくれたのであった。

ところで、いまわたくしは、狼の子どもと逆の場合について少し語ってみたいと思う。というのは、人間でない動物――

といっても人間に一ばん近いとされている動物であるチンパンジーを、人間なみに育てたとき、人間なみになれるものだろうかという問題について、アメリカの心理学者ヘイス夫妻のおこなった実験を紹介して、そこから得られる重要な事実について考えてみたいのである。

* * *

ヘイス夫妻は、一匹のチンパンジーを生後数日から自分たちの家庭につれてきて、人間の子どもと同じようにして三才になるまで育ててみたのである。その試みのねらいは、人間と異なる素質を持っているチンパンジーに人間と同じ文化的環境を与えてみて、環境の影響を検討してみることであった。そしてその結果を、実験室のおりの中で育てられた他のチン

パンジーと比較してみるとということもおこなっているのである。

ヘイス夫妻は、このチンパンジーにヴィキイという名をつけて、全く人間の子どもと同じように育てた。そして、何か特別に訓練をするときには、食事の際におこない、非常に細かな記録をとったのである。

* * *

ヴィキイの精神発達は、全体的にいうならば、少なくとも行動の上では、人間の正常な子どもの発達と平行しており、正常な三才児なみの段階に達していた。

ヴィキイは、人間の子どもと同じように、一日のほとんど大部分の時間を遊びに費している。ただし、その遊びは、人間の子どもにくらべてはるかに運動的であった。走ったり、ぶらさがったり、よじのぼったり、とんだりすることに夢中になっていて、あちらからこちらへと場所を移動するという単純な遊びに一ばん夢中になっていた。そのために、いわゆる運動的巧みさが非常に発達している。

ヴィキイと人間の子どもの違いの一ばん大きい点は、声をあんまり出さないということである。人間の子どもは、乳児期から一日中たえず何かしら声を出し、おしゃべりをするのに、ヴィキイはあんまり声を出さなかった。それでも、生

後一年間は彼女は多少は片言めいた声を出していたが、その後は声を出してする遊びというものをほとんどしなくなった。(人間の子どもの場合には、声を出すおしゃべりは一つの遊びである)。

* * *

行動的な面からヴィキイの遊びを見ると、まずいろいろのものをいじくる遊びに没頭している。この点では人間の三才児と興味の点でも能力の点でもたいして変らない。たとえば、なぐりがきをする、はさみで切る、積木をつむ、ボールを投げたりとったりする、電燈のスイッチをいじる、ドアーのかぎをいじる、といったようなことを、人間の子どもと同じような熱心さで、また同じくらいの巧みさでやっている。とくに彼女の一番好きなおもちゃは、電話のおもちゃで、そのダイヤルをまわし受話器を耳にあてる遊びに夢中になっていた。

また、ヴィキイは、人間の子どもと同じようにひととを相手にする社会的遊びが大好きである。すなわち、手をひっぱってくすぐらせてみたり、おぶってくれとねだったり、新しい道具やおもちゃを与えるひととの手をひっぱってその上におかせてみたり、はじめてのひとが来ると家族のものと同じように遊んだりする。そして、とくに、模放遊びが好きな点においても、人間の子どもと同じようである。たとえば、人間の

子どもが家事のまねをするように同じことをする。掃除、皿洗い、鉛筆けずり、裁縫、つちでたたく、ペンキ塗り、写真をはる、といったようなことを、そっくりまねして喜んで遊んでいる。

このような行動の面における知能の程度をみるために、ヘイス夫妻は、実験的テストをおこなっている。それは、キャンデーをいろいろのやり方でとるテストである。たとえば、ボールを投げつけてたたきおとす、棒をつかってトンネルから押し出す、壁の電気スイッチを押すと天井からごぼうびのキャンデーが落ちてくる、といったような種類の問題を六つやらせるのである。この六つの問題に対して、ヴィキイは、人間の三才児と同じ程度にできたのである。(実験室の、おりの中で育てられた他のチンパンジーは大部分できなかった) このようにしてみたところでは、ヴィキイの一般知能は、人間の三才児とほぼ同じ程度であり、ほかのテストをやってみても同じようであることが見出された。しかし、知能テストをやってみても、言語の関連のあるものでは完全に失敗している。結局、言語は、人間がチンパンジーに対して持っている優越性を示す最大の、そして最も明瞭な領域であることが見出されたのである。

* * *

そこで今度は、ヴィキイの言語の面についてみると、彼女は喃語をしゃべりはじめるのがおそく、生後五か月ごろからようやくほんの少ししゃべりはじめている。しかし、その喃語の際の感情表現の様子をみると、人間と同じような発声は十分できそうに観察された。けれども、自発的にしゃべるといふことはとても期待できない状態であった。そこで、ヘイス夫妻は、五か月から、言語の特別訓練をはじめた。

まず最初は、ほうびを与えることによって声を出させるという訓練をした。これはふだんの彼女の声とはちがう発声させたのであるが、その声を出すことを覚えるのに五か月かかった。そして、発声するには、非常に緊張してしかめ面をするほどの努力を必要とした。次には、ヴィキイの唇を指で適当にいじり操作することによって、ことばをいわせることをおこなったのであるが、ついに「ママ」といわせることができるようになった。喉頭を使わないで、唇の振動だけで出す音ではあるが、とにかく聞きとれる程度にいえるようになったのである。これができるようになったところで、ヘイス夫妻は、今度は唇を操作することをしないで、いつて聞かせた音をまねさせるようにして他のことばを練習させた。こうして二才半になるころまでの間に、ヴィキイは「パパ」と「カップ」という二語を、ちょうど人間のささやくことばの

ような感じでいえるようになった。

これらの三つのことばを、それぞれ適当な場面に用いるように教えたところが、ヘイス夫妻に対して「パパ」「ママ」といい、飲みものがほしいときには「カップ」というようになった。しかし、時には混乱して用いるところをまちがえることもあり、ことにあわてるとそうであった。全体的にいつて彼女の話すことばは、脳髓の障害による失語症といわれる言語障害をもった人間の話すことばに似ているように観察されている。

ヴィキイの言語能力はこのようにして、人間の子どもにくらべてその自発語においていちじるしく劣っているのであるが、理解能力においてもやはり劣っていることが観察されている。

* * *

ヘイス夫妻のおこなったチンパンジーを育てる実験の結果のきわめて大まかな紹介は以上のとおりであるが、この実験はさきにもいったように狼に育てられた子どもの記録と同じように、非常に大切な問題をわたくしたちに教えてくれるものである。

まず、ヴィキイというチンパンジーの子を人間の子どもと同じように育てたところ、人間の子どもの三才にいたるまで

の発達とほとんど平行的に発達することが見出されている。

この点で、チンパンジーは、少なくとも三才にいたるまでは人間と同じレベルだといってもいいであろう。

しかし、これは行動の面だけである。言語の面においては、チンパンジーは決定的に人間に及ばないのである。ヘイス夫妻の異常な努力をもってしても、ついに人間と同じ程度の言語をおぼえさせることはできなかったのである。

言語能力——そしてそれに基く知能、それは人間のみに与えられている素質の開発によるものである。この素質を持っていないチンパンジーは、どんなに人間の子どもと同じ環境で、同じ育て方をしていても、すなわち人間と同じ文化的環境の中で成長しても、言語を人間なみに獲得することはできないのである。

言語は人間の文化の基礎的素材であり、しかも人間のみの持っているものである。狼に育てられた子どもが人間社会に復帰してから言語を徐々にではあるが習得したのは、彼らが人間であったからである。チンパンジーではついに人間のことばを人間なみに習得できなかった。人間なみに育てられても、ついに人間なみになれないというチンパンジーの実験は、人間の素質の重要さをわたくしたちに教えてくれるのである。